

飯能情緒

Vol.03
May 2018

二〇一八年残したい風情

巻頭インタビュー 吉田行男さん

ただいまの山 宮尾節子さん

飯能ひな飾り展の魅力

コラム いいね!

■飯能織物協同組合事務所

■小町朝市

■感幸(観光)地としての飯能

■飯能の風情って？

飯能情緒

飯能文化の良さをワンテーマで伝える冊子。今号は「文化新聞社」とのコラボレーション企画となっています。ご意見・ご感想または制作依頼は、下記までご連絡ください。

■発行者

取材・執筆 石井 茂 Tel: 042-973-4004 mail@ishii-design.info

デザイン・撮影 黒田 靖 Tel: 042-973-0272 iy9y-krd@asahi-net.or.jp

■制作協力 宮尾 節子、井上 七恵、代 政雄

■印刷 文化新聞社 Tel: 042-973-2525 <http://www.bunkashinbun.co.jp/>



二〇一八年 残したい風情

ムーミンのテーマパーク誘致が一昨年に決定し、園のオープンが今年の秋に迫っています。前後するように、新しい感覚のカフェが次々とでき、空店舗・空き家のリノベーションが活発化するなど、今、飯能地域はゆるやかな変化の時を迎えているようです。2年後には、東京オリンピックを控え、都心からほど近いこのエリアが、注目に値する要件が揃いつつあるようにも思えます。

こうしたなか、飯能織物協同組合事務所棟の所有権移転を耳にしたのは、今年に入り程なくしてのこと。

飯能地域を代表する歴史的建造物の動向について、多くの市民が関心を寄せている状況にあります。

飯能のまちの良さは、昔からちっとも変わらないものであり、ここに暮らしている人々のうちに、共通認識が存在しているように思えてなりません。当冊子では、それを「飯能情緒」と名付けております。

2018年、変わりゆく時代のなかで、この地域は何処へ向かうのが正解なのでしょう。そんな制作意図を抱えつつ、

詩人の宮尾節子さんに同伴をお願いし、ちょうど「飯能ひな飾り展」が催されていたまちを歩き、たくさんの人に会い、耳を傾け、ぜひお話をお伺いしたいと考えていた生粋の地元っ子・吉田行男さんにインタビューを行いました。

飯能中央公園から天龍山を望む

「飯能情緒」前号の記事づくりでお世話になった吉田行男さん。今回もインタビューをお願いすると、快く引き受けてくださいました。インタビューは、第1号において「こころの建築・遠藤新・旧平岡レース事務所棟」を寄稿いただいた宮尾節子さんです。

◆飯能商工会議所・女性会の仕事で、「飯能郷土かるた」を作ったとき、私は読み札づくりに携わりました。その際に絵札を担当されたのが吉田さんでした。吉田さんの描かれた47枚のかるたの絵柄はそれぞれ、どこか懐かしい昭和の味わいがあり、今のアニメの時代にはない、やわらかさや温かさにとほとして、私はとても気に入っていました。

— そうでしたか。美大で日本画をやっていたからかもしれませんね。頼まれたので描いたのですが、やりだすとつい気合いが入ってしまつて。かるたのひとつひとつの場所に、足を運んでちゃんと確かめながら描きました。私はずっと飯能なので、思い入れもありますしね。



飯能郷土かるた

◆私は20年ほど前に飯能に越して来たのですが、風情がある古い町並みや、おっとりした人々の雰囲気、いっぺんでこのまじが気に入りました。人の懐がふかいというか、少々変わり者であっても、あまり気にせず受け入れてくれる太っ腹なところがありますよ(笑)。熊本出身の詩人の蔵原伸二郎も、東京から戦争疎開ということで飯能に移り住むのですが、ずいぶん気に入ったようで、結局亡くなるまでこの地で過ごします。この地の風土や風景を

愛し、「狐」の詩など数々の代表作を産み出しています。町田多可次さんをはじめとして、彼を慕う地元の詩人や物心両面で彼を支える文化的な市民がいたからこそ、蔵原は晩年に揺るぎない詩人の地位も名誉も得ることができました。

— 町田さんは私の叔父なんです。飯能は、閉鎖的だという方もいらつしやいます。が、一旦入り込んで来たら、受け入れ、仲間として認める土壌があるように思います。



プロフィール
吉田行男さん

吉田屋呉服店5代目。飯能幼稚園、飯能第一小学校、中学校、川越高校を卒業。武蔵野美術大学で日本画を学び、高麗川中学校で4年ほど教鞭を取った後に、家業の呉服店を継ぐ。

◆吉田さんから見て、飯能の良さはどんなところにあるとお考えですか。

— 美大の時の恩師が飯能を訪れた時の感想として、「飯能は、変わらないこの感じがいい。」と言っていました。幕末の飯能戦争の時に二度焼け野原になっていたのですが、先の戦争では空襲にあつてなくて、この辺りの町割りや江戸時代からそれほど変わっていませんからね。うちは、飯能戦争の復興時に吾野から出て来たようすが、中清さん、入口さん、麻六さんは江戸時代から続いている老舗です。

◆飯能の人は、おっとりしてる反面、江戸っ子のような切符の良さや、粋というか独特の文化的な嗅覚や美学がありますよね。

— ここは六斎市が立ち、昔から相当にぎわっていたようです。人の出入りは多く、こうした人や物の盛んな交わりのなかから文化が生まれ、それを楽しむ気質が出来ていったのかもしれない。西川材などを通した江戸との交流は盛んで、お囃子もテンスケ・テンの江戸囃子ですからね。

ここまでのお二人のお話により、粋を大切にしている飯能人の美意識が浮かび上がってきました。商売人のセンスを持ちながら、遊びの部分にもこだわる人々の姿です。

◆吉田屋呉服店さんの建物は、改築されていますが、かつては織物業で栄えた伝統ある、このまち並みびっぴりな感じ、ずっと昔からあったみたいです。柱の形や庭の植栽にいたる隅々まで、ずいぶん配慮されていますね。脇の陳列ケースや正面の門構え、敷石なども感激しました。ひな飾り展でも、メイン会場「絹甚」と並び、ぼちり存在感を出しています。

— 平成11年に焼失させてしまい、どうしようかと悩んでいたのですが、皆さまのお力添えにより、再建することができました。設計は、創夢舎の吉野さんをお願いし、西川材を多く使っていたが、伝統的な意匠のお店に仕上がりました。また、地元の家さんやいろんな方たちの手を借りながら、店先や店内の床にモザイク装飾を施していただき、店の復興を楽しい



諏訪八幡神社にて

吉田屋呉服店

経験に変えることができました。美術をやっていたものですから、刺激的な作り手を見つけると「やっていただけないか」と声をかけてしまうんですね。

◆飯能のまちには、独特のゆるい雰囲気というか、気持ちを落ち着かせるものがあるようです。飯能のまちに来ると、みんなほっとすると言います。

— それは、山がすぐ近くにあるからではないかなあと思いますがね。私なんかは、平らな土地が続いているよりも、飯能や日

高、青梅などがそうなのですが、多少の起伏がある場所の方が気持ちが悪く着くんですよ。夕方になって、陽が落ちていく山並みがちゃんとあるのがいい。山に抱かれている安心感は、そこに住む人々の心情に少なからず影響を与えているのでしょう。

数年前のことになりますが、「飯能情緒」などの冊子をつくる際にも、吉田さんは「良いことはどんどんやってほしい。好きなようにやればいい。」と応援してくれた記憶があります。今、地方の時代と言わ

れ、テーマパークの誘致やエコツーリズムなどにより注目を集め、若い人たちの動きが活発化している飯能地域を吉田さんがどう見ているのか、また、どうしていけばいいと考えているのか、その辺りに話は進んでいきます。

◆この度の冊子のテーマを「2018年残したい風情」としました。私は、このまちの人も風景も本当に好きで、これからもずっと暮らしていきたいと思っています。親しい仲間は「飯能はこのままでいいんじゃない。何もなくて」と言ったりもします(笑)。

— 商店街のことを言えば、昔に比べれば、活気がなくなっていると言わざるを得ません。大きなスーパーにはなかなか対抗できませんから、厳しい状況が続いているのは全国的な傾向です。そうしたなかで、にぎわいをつくっていくことは大切だと思います。一年のうちで商店街が最も活気づくのは、「飯能まつり」の時ですからね。「飯能ひな飾り展」も、地域に定着した感があります。老若男女の多くの人が、

街を行き交う姿を見るのはうれしいですし、若い人たちも、街の活性化に関心を持つてくれる人が本当に多くなって、地域を盛り上げようとしてくれます。難しいのは、世代の交代です。後継ぎのいないお店は住居を兼ねているということもあり、店先だけを誰かに貸すということができない。昔からの店を再活用できないのは、そんな事情があるんですね。

◆ムーミンのテーマパークができるのは大歓迎ですが、そのにぎわいがパーク内だけで終わってしまわないといいですね。観光客が訪れた際に、飲食もお土産も施設内だけで事足りてしまっ、後は貸切りバスでさっさと街なかを素通りして帰ってしま、昔からある地元の店舗には恩恵をもたらさない。そんな状況になってしまつたら、との危惧の声も聞こえてきます。

— 波及効果をもたらすように、地域においても努力が必要だと思えます。私はまちの回遊性を高めていくプロジェクトに参加させていただいています。この秋、一部オープン予定のムーミンパークのある宮



田園図書館方面から飯能河原を望む

沢湖周辺、飯能河原から天覧山周辺、阿須のあけぼの子どもの森公園周辺、この3点を観光の核として「トライアングルゾーン」と呼んで、観光客の回遊拠点とし、観光資源を結んでいこうとするものです。やはりこうした具体的な計画は必要です



地元の子なら、誰もが遊んだ記憶がある飯能河原から少しだけ離れたところにある河原。

ね。少し前になります。登山家の田部井淳子さんが河原周辺を歩かれた時、川沿いをずっと歩いていくことができず途中で崖上上がり、道路に出なければならなくなることをたいへん残念がっていました。でも現在は、ずっと川沿いを途切れることなく歩いて楽しめる

ような遊歩道を作っています。飯能の豊かな自然をたっぷり楽しんでもらうためにも、川沿いの遊歩道の完成は画期的ですね。また、中心市街地でも、路地ゲルメなどの催しが盛んに行われ、あちこちの通りや小さな路地にそれぞれ特徴のある名前の標識が付いたりして、まちが楽しくなりました。

◆ほかとはちがう、飯能らしさをどこに見つけ、どうアピールしていくか。そこがこれからは大切ですね。

― 駅を降りて、どこの街に来たのかわからないような場所にはたくありません。私の恩師が「変わらない感じがいい。」と言ったように、幸い、飯能には好ましい風情が残っていると思います。

◆国の有形文化財に指定された「飯能織物協同組合事務所棟」の所有権が移転し、今後の動向に多くの市民が注目しています。それぞれに事情があつて、悩ましいところもありますが、最近では全国的な傾向として、古い建物を壊すのではなく、修繕しながら古さを活かしつつ、新しい発想で再活用するという「リノベーション」の大きな波が起きています。どこかの町では、空き店舗の再活用としてビルの一角にランドリーやミシンが備えられ、コーヒーも飲める「ランドリーカフェ」ができていて、赤ちゃんから「年配者までみんなが集える「まちの駅」みたいになっているようです。織協の建物も、お年寄りも若者も子どもたちも、誰もが立ち寄れて楽しめるような、使い方ができれば、素敵だなあと思っています。



飯能河原遊水場ボート場…飯能遊覧地計画の一環として水泳場、ボート場とするためのコンクリート製堰が設置された。(津森雅昭氏所蔵・飯能市立博物館提供)



れません。

◆本日、お話を伺いし、好んで刺激を受け入れる寛容で積極的な面と、変わらないところに味わいがある飯能の姿が浮かび上がりました。このまちならではの良さを大事にしながら、少しずつさらに良いように進化していけるといいですね。

― そうしたことを適えるには、人や資金、タイミングなど、さまざまな条件を揃えることが必要で、みんなで知恵を出さなければなりません。建物はいかに活用されるかが大事ですからね。そういう意味では、この冊子の前号でも紹介されましたように、相続人がおらず、市に寄贈され、市民に運用を任されている「店蔵絹甚」は、大変ラッキーに事が運んだ例と言えます。

飯能の魅力は何処にあるのか。緑と清流のまち、森林文化都市、エコツーリズムのまち…昔から語られ続けてきた永遠の命題です。捉えどころがなく、ひと言では表現しきれないところに、このまちの良さがあろうです。

織協に関していえば、まちのためになるものとして活かすことができるのか…この度の所有権の移転は、この事を市民が考える、良い機会になつているのかも

― 飯能の良いところに、人と人とのつながりは大きいです。義理人情も大切でありまして、地元の店でお互いに売り買いし合うような関係性はなくすべきではありませんね。若い方にも注目しております。この飯能大通り商店街でも、街角にできたポケットパークで定期市(音楽イベント)を開くなど、面白い動きをしているグループがあります。そんな彼らにも、催し物をする際には周辺への挨拶を欠かさない姿勢が求められます。ひと言、声をかけるだけでスムーズに問題なく運ぶことは多いです。新しい人も、古くからの人も、店主一人一人が、まちを大切に思い、お互いを思いやりながら、真面目に商売をやっていくしかないのではないでしょうか。

ひとがつづく、まち。

ときどき大通りでお見かけする吉田さんは、呉服屋さんというお商売柄かいつも和服姿。それも、あらずと気になる独特の着こなし。いったいどこが独特なのか。今回インタビューでじっくり目の前で拝見して、判った。着物の下に長襦袢でなく立ち襟の白シャツを着ておられる。明治の頃の映画に出てくる書生さん風の着こなし、これだ。粋なだけでなく、きつと軽やかに立ち働けるスタイルでもあるのだろう。すつとすわる正座も自然な店先の畳で話し出される物腰も穏やかだ。美大で日本画を専攻されていたこともお商売との自然なつながりに思えた。

飯能郷土かるたの絵札を拝見したときも、お祭りの時よく見かける、面白い「地口行灯」の絵と同じ人だと知って驚いた。まちの行事にもたくさん関わっておられる吉田さんは五代目。昔からのこのまちのこと、まちのひとのことを、詳しく語っていただき、目から鱗もあり、新参者には学ぶことが多いことが多かった。

わたしが常々もっていた疑問点などもお尋ねしてみた。古い地元の人と、新しく住み着いた者たちがどう歩み寄って、どうつながっていけば、まちが活性化するのか。両者にはどうしても埋められない遠慮や隔たりがあつて、どうもそれがまち全体の発展をいまひとつ消極的にしているように見える。それが、もつたいない。今回話題にのぼった織協の保存問題なども、伝統あるまちのシンボルだから「まちの記憶」として遺りたいと積極的なのは案外新参

者で、そこまでしても少し引いて冷静に見ている古い地元民との温度差はつねに見え隠れする。それぞれに思惑があつて、悩ましいところだが、吉田さんの言われていたように「どこに来たのかわからないような、顔のないまちにはなりたくない。お互いの融和点がなかなか見えてこないのがもどかしい。

わたしたちの会話のなかで繰り返し出てきた「このままでいい飯能」と「このままでは心配な飯能」をどう残し、どう変えていくか。大きなテーマパークの展開で新たな局面を迎えている2018年現在の飯能は、それが再び問われているようだ。

ところで、先日とても感動的な光景に遭遇した。「小町朝市」というイベント会場で、お祭りのお囃子連の男衆と、新参のジャズ・グループの演奏者たちが、まるで飯能祭りの「引き合せ」のような熱いセッションを始めたのだ。演奏者交代時のハプニングだったと思うが、お互い自慢の腕で自信の音色をぶつけあう、激しい掛け合いバトルとなった。どちらも負けてない、お互いに熱くなればなるほど、どんどん会場は盛り上がってくる。お祭りのたのしさとライブのたのしさがいっぺんに味わえて、観客はどつと沸いた。ああ、これだなあ。こんなふうには、古きも新しきも共にお互いの良さを持ち寄って仲良く暮らしたら、まちはもつと元気でたのしくなるのになあ、胸が熱くなった。

吉田さんは「飯能は震災に遭わなかったもので、ひとが続いているのですよ」と言われた。「ひとがつづく」いいことばだ。古いひとから新しいひとへと、いつまでもひとが続くまちであってほしい。ひとが続けば、ひとを追いかけてずっと、まちもつづく。

プロフィール
宮尾節子さん(詩人)

『文藝飯能』詩部門選者・奥武蔵新聞あおぞら通信にて「せつちゃんの詩のコーナー」担当。既刊詩集「くじらの日」「かくや姫の開封」「妖精戦争」「ドストエフスキーの青空」「恋文病」「牛乳岳」「明日戦争がはじまる」「せつちゃんの詩」など。SNSで2014年公開した詩「明日戦争がはじまる」が各種メディアで話題になる。第10回ラ・メール賞を受賞(1993年)。高知県出身。

ただいまの山

宮尾節子

わたしのまらには
朝は山の向こうで誰かが
宝石箱を開けてしまったように
東の空を輝かせながら
ぴかぴかの大陽が昇ってくる
おはようの山がある

わたしのまらには
春は花びらをいちめんに
うかべて流れる花の川がある
夏には水しぶきあげて人々で
にぎわう
げんきな声の川がある
なきたい時はそつと
わたしのそばで
流れてくれる涙の川がある

飯能に帰ると、ほつとする
誰もが言うことは
飯能に來ると、ほつとする
訪れたひとつも同じく

わたしのまらには
夕暮れ
つかれた足で駅に降りれば
てっぺんに
ぴかりと光る一番星をつけて
おかえりと迎えてくれる
ただいまの山がある

有間峰 写真提供／代政雄（日高市在住）
山岳風景に魅せられ、主に国内の山を撮影。
近年はより身近な奥武蔵の風景を撮影。
全日本山岳写真協会、狹山市写真作家協会所属。



メイン会場「店蔵絹甚」



飯能ひな飾り展 の魅力

飯能ひな飾り展は、市民がはじめた手作りのイベントである。今年で13回目となるのだから、飯能の春に欠くことのできない風物詩となっている。

「どうして飯能でひな飾り?」と、その由来について問われることもあるようだが、繁華していたまちの記憶をお披露目できる機会として地域の人たちが、おもしろがって参加している。

2018年は119の出展会場が揃った。決まりはあまりなくて、自由な雰囲気を楽しめるところが盛り上がりの秘訣。ここに住む人々の思いや生きざまが重なり、ひな飾りを通してまちの魅力が伝わってくる。

ひな咲くまち。

春になると、ぼつりぼつりと花が咲き始めるように、このイベントは何気なくスタートする。2018年の場合、2月20日～3月11日までの開催となったが、参加会場が一斉に開かれるのではなく、それぞれの都合で、開始を遅らせるところもある。催しは、土日のみ開催というところもある。催されているエリアも広く、市街地から山間地まで飯能市内全域に及んでいる。土地勘がそんなになく、初めて「飯能ひな飾り展」に訪れた方からすると、どう巡ったらいいか、つかみどころがないと感じる方もいらつしやるようである。土日でなければ、各商店や民家が取って置きひなを飾るばかりで、特別な催しがあるわけではない。配布されている専用マップを片手に、思い思いに廻ればそれでよしということになる。

遊び心と探求心。

メイン会場とされているのは、飯能市文



明治40年頃の大通りと絹甚
「ふるさとの思い出 写真集明治大正昭和 飯能」より転載。



化財の「店蔵絹甚」。ここにはぜひ訪れてみるべきだろう。「店蔵絹甚」は、明治中期に建てられた建物で、商家として当時

さも、仕事の進め方も、プロ顔負け。これだけの宝をこの時だけのお披露目にしておくのはもったいなくもある。

「飯能ひな飾り展」にとって、「飯能布塾」の存在は大きい。岡部さんらメンバーが常に遊び心と探求心を持って活動を続けてきたことで、つるし雛づくりの魅力を地域に波及させた。雛を飾るだけでなく、ものづくりを楽しむイベントとなったのである。

職人気質の専門店。

飯能市には、「まちなか」と市民が親しみを込めて呼んでいるエリアに、いくつかの商店街が連なっている。飯能中央通り商店街はそのうちの一つで、JR東飯能駅から西に延びる。

店々には、ひながそれぞれれのやり方で飾り付けられている。そのなかで目に留まったのが「タケシヨウ



の姿を残している。そして、この存在感を放つ建物に飾られているのが、ボランティアでつるし雛を手作りする「飯能布塾」メンバーの作品群だ。この時のために1年間を費やして作られたもので、その緻密な可愛らしい仕上がりぶりには、誰もが虜になる。

「飯能布塾」で、世話役として働いているのが、岡部とわ子さん。「はじめは、そんな武田ミシン」。今となつてはあまり見られないミシン専門店であり、ミシンを取り扱って70年を超える。店頭にはひな飾りとともに、アンティークミシンが並べられている。

「先代はがんこおやじとして通っていた人で、ミシンを大事に取り扱わないような物言いをするお客様に対しては、『他に持つていってくれ』と言いつつ放ったほど。その代わりに腕は一流で、『100%の修理をする』が口癖でした。」そう話してくれたたの



「飯能布塾」世話役の岡部とわ子さん。作品一つ一つに思い入れがあり、作品づくりのエピソードを話してくれました。

つもりではなかったのですけれど、たくさんの方が見に来てくれるので、こうして11年も続いているのです。仲間にも恵まれましたから：」と、感激気味にこれまでを振り返る。学校の先生をしていた岡部さんは、仕事を退いた後、つるし雛づくりの活動に情熱を捧げている。

それにしても驚くのは、完成度の高さである。良い作品づくりに向かう妥協の無

は、高橋正さん・知子さんご夫妻。今でも、職人気質が受け継がれており、市内外のミシン好きがこをめぐして来店する。

同店に限らず、この商店街には職人気質の専門店が多い。テラーや和菓子店など、昔ながらの店があるほか、つい最近まで、帽子店、傘店、提灯店といった単商品を取り扱うこだわりの店が存在していた。

銀座通り看板建築。

街路灯やカラー舗装などが施され、いかにも商店街っぽさを漂わせているのが、飯能銀座商店街である。「入間馬車鉄道」や「武蔵野鉄道」(現西武鉄道)開通とともに発展を遂げた商店街で、飯能駅から近いいため、今も日用品を取り扱う地元のお店が軒を連ねる。米穀店や鮮魚店、豆腐屋、和菓子店など、食品を取り扱うお店も多く、飯能のなかでは最もにぎわう商店街だ。

商店街の中ほどにある「吉川理容店」におじゃまする。同店は、木造建築に正面だ

蔵があるまち。

先に紹介した「店蔵絹甚」もそうであるが、市内にはいくつかの蔵が残っている。なかでも、山と街をつなぐ場所として古くから市が開かれていた飯能大通り商店街には、創業100年を超える老舗が多く、そうした店はい立派な蔵を有し



蔵が商いに活かされている(中清商店、銀河堂)

ていたりする。

訪ねたのは、「丸屋酒店」。創業して135年を迎える老舗で、店内には洋酒、日本酒、焼酎、ワインなどのお酒類のほか、全国各地の味噌を量り売りするなど、こだわりの商品が並ぶ。特に店主が買い揃えてきたという洋酒は、数え切れないほどの種類。今では手に入りにくい高価なお



丸屋酒店・5代目の井上将太さん



酒もあり、陳列棚はまるでギャラリーのようだ。「ここにいと、なぜか落ち着く。」お酒に囲まれながらそう語るのは、5代目の井上将太さん。お客様の好みを分析し、その方が最もおいしいと感じるお酒を選ぶのが得意な仕事人だ。静かな語り口が信頼を得ているようで、彼を訪ねるリピーターが

けお面をかぶせるように西洋風にアレンジされた看板建築が特徴となっていて、当地にて長年営業している。「自分が生まれて51年経っているけれど、このお店の装いは昔のまま。全然変わっ



外観も、店内も、レトロ。こんな店が残っている商店街は楽しい。



商店街から脇道に入ると、昔繁盛したであろう旅館が佇む。

古いものの価値を理解されていた方だったそう。鏡も、床も、ガラス窓も、イスなどの器具も、長年使い込まれたものばかり。それらがいい具合に時を重ね、整髪してもらいながらタイムトリップできる。

ていません。「看板建築への関心を伝えると、店主の吉川行一さんが店内も案内してくれる。先代が



オープンサイト建築設計事務所
双木洋介さん

当事務所は、誰でも気軽に立ち寄れるオープンな空間をめざして、飯能銀座商店街に開設しました。「飯能ひな飾り展」がいいのは、商店主との触れ合いをもたらしているところ。商店街をぶらぶら歩きながら、ひな飾りを見て廻り、買物を楽しんでいる。



花街の風情を残す横丁

増えたという。

ちなみに、同店も蔵を所有している。実は、「飯能ひな飾り展」はこの店の女将が蔵で見つけた古い雛人形に端を発している。市内の店舗や民家が保管している雛人形をお披露目することで、地域おこしにつながると考えたのである。

路地に風情。

まちなかの面白さに路地がある。空襲



上/「割烹煙屋」の看板は、著名な文学者の書であるらしい。下/煙屋と煙屋横丁。こんなふうにも眺めてみても、やっぱり風情がある。

を免れ、区画整理がなされていない飯能の市街地には、人が通り抜けるのに心地よく感じられる細道が、あちこちに残る。生活感あふれる路地や花街情緒を残す横丁には、それぞれに因んだ名前が付けられていて、訪ね歩きが楽しい。

大通り商店街を脇に入る「煙屋横丁」は、飯能有数の料亭であった「煙屋」に因んだ路地である。今、「煙屋」はうなぎ店を営んでおられるが、横丁から眺められるその外観は華やかかなりし頃の料亭そのもの。その昔、芸者さんがくぐったと思われる玄関を開け、ひな飾りを撮影させてもらったが、「割烹煙屋」と記された木の看板や玄関の風情から、格式の高さを感じずにはいられない。

「煙屋横丁」の先には、八千代と高島屋の二軒の料亭がある。屋敷林に囲まれ、三味線や太鼓の音が鳴り響きそうな粋な風情を醸している。さらに進むと、「南銀座街」へと続く。「ここは「婦美町」と呼ばれていた界隈で、スナックや小料理屋が建ち並ぶなかに花街の名残を見つけることができる。

飯能ひな飾り展のこれまで

まさに手作りイベントだった。

当初は市民グループ「木馬をつくる会」(現在は飯能ひな飾り展実行委員会が主催していた。イベント名を「雛飾りお宝展in飯能」とし、主旨「家庭に残る雛飾りやお宝を街に展示し、地域・商店街の活性化を図る」を説明し、参加を募ったところ、初回(2006年)にして45か所の店舗民家が出演。店蔵絹甚への出展は、「文化新聞」にて募集。ポスター、チラシはコピー機でプリントし、朝日、毎日、読売の各販売店の協力により無料で折込みをもらった。

つくる楽しみをもたらした。

ひな飾りの展示とともに地域に定着していったのが、つるし飾りづくりだ。店蔵絹甚の活用事業となった「飯能布塾」や、商店街の有志が集まる「商店街手仕事お母さ



はじまりのきっかけとなった古い雛人形



(株)マルナカ製ゴブラン織りの掛け軸

ん」をはじめに、地域の多様な場面でつるし飾りがつくられるようになった。高校の授業で採用されたり、福祉施設などでの趣味活動、リハビリテーションとしても取り組まれている。

春の風物詩となった。

類似イベントが周辺市町村でも行われるようになった。そこで、スタンラリーを設けたり、他市との連携や他イベントとの同時開催を図る。また、西武鉄道の協力により、中吊り広告や駅貼りポスターを掲示。第13回目では、英語版ポスターを周辺地域に掲示し、外国人の集客をめざした。春は、山に囲まれた飯能が輝きはじめる季節。「飯能ひな飾り展」は、地域の魅力をそのまま表現できる、またとない機会となっている。



「飯能ひな飾り展」でも、楽しい展示を行っていた。

飯能織物協同組合事務所 地域の産業遺産。

- 大正11年の建築。構造は、木造総2階建て、寄棟、瓦葺で、外壁は、長い板を横に張り、上に重ねていく下見板張りという洋風建築。洋風でありながら、屋根の両端にしゃちほこが据えられ、独特の和洋折衷様式を今にとどめている。
- 近世以降、飯能地域は、西川材のほか、養蚕や織物産業で栄えた。絹の検査や関係する税の徴収は、すべて同事務所で行われたという。その取引で蓄えた財力で、武蔵野鉄道(現西武鉄道)を呼び込むことにも成功している(文化新聞記事抜粋)。



モダンな古民家。

ここへ行くには、飯能駅から名栗川沿いを辿り、バスだと45分ほどかかる。周囲はますます山深く、川向うには白雲山の観音様が目に入ってくる。平沼家は「鳥居観音」の開祖である平沼彌太郎の分家にあたり、「古民家ひらぬま」は、現当主の祖父・平沼新左衛門氏によって建てられたものである。

この古民家の特徴は、何といつてもそのセンスの良さにある。建築的な価値はさて置き、要所に散りばめられた室内装飾は、こうした山奥にあるものとは思えないほどの凝りようだ。現当主の平沼誠之さんも、「情報が取れない時代であったはずなのに、どのようにして装飾の粋を集めたような室内を造り上げることができたのか。」祖父の仕事を不思議がる。

建築設計士有志の働きかけにより、埼玉県の「景観重要建造物」にも指定された。「落ち着いた色調の外観が、背景となる山々の景色と調和し、山里の景観の一部となっている。」などが指定の理由。存在自体が地域に良い影響を与えることが認められたというわけだ。

当初、この指定について平沼さんは、戸惑いがあったという。というのも、母が一人で住んでいたというこの母屋は長年一部分しか使われておらず、暗くて、陰気な印象しか持っていなかったからである。

活用されて輝く。

地方が注目され、古民家は重要な地域資源として位置付けられるようになった。飯能市が展開するエコツーリズムのシーンでも「古民家ひらぬま」の価値が認められ、幾度となく活用されているし、「飯能ひな飾り展」は第7回から参加し、今や無くてはならない展示会場の一つとなっている。

問題は、「景観重要建造物」に指定されたはしたものの、その活用や保存方法は個人に任されていることだろう。「古民家ひらぬま」では、毎月1日から10日(11時〜16時)までカフェ・軽食処として営業するほか、不定期でギャラリーとして貸し出しを



風土にわけ込む古民家ひらぬま。後ろに白雲山の山並みが見える。



行っている。

暗くて、陰気な印象しかなかった建物は、みんなに観てもらい、活用されていくこ



とで輝きを取り戻した。モダンな古民家は、艶やかなひな飾りとの相性も抜群で、奥様がコーディネートする飾り付けも凝

ついで、観る者を飽きさせることはない。名栗ののんびりとした風景も手伝って、ここを訪れる人の多くがリピーターとなる。



旧南川小学校



撮影の呼びかけに、大勢の方が集まってくれた。皆さん仲が良さそう。

桁となったことになる。出展するしないかは、それぞれ出展者の自由意思に任ざれていて、「もう齢だから、よすべ。」などとなつたら、それはそれで仕方がないこととなつている。各会場の都合によつて違うが、約20日間の開催期間中、見物客を受け入れなければならぬわけし、出展するとなれば、相応の準備期間も必要だから、骨が折れることでもある。そんなふうには思いを巡らせると、この数字はやっぱりスゴイことなんじゃないかと思う。

よそ行きではない普段通りの生活を垣間見られるところが、「飯能ひな飾り展」の大きな魅力となっている。冒頭にてつかみどころの無さを指摘したが、そんな無きに一貫性を求める方が無理なのであり、訪れた人が思い思いにまちの風情や楽しみを探し当てられるところにこのイベントの面白さがある。

ひっそりとたたずむ。

一日数本のバスしか通らない中藤地区ではあるが、溪流を望むひっそりとした環境が生まれ、美術ギャラリーやステンドグラスの工房が開かれている。さらにこの先を進むと、神仏習合の寺と知られる竹寺がある。入間川の支流である中藤川沿い



中藤地区



ギャラリー花筏の展示

に集落を形成する小さなエリアながら、共同の駐車場を設けるなど、地域が協力してイベントを盛り上げている雰囲気が好き。

「ギャラリー花筏」を訪ねてみた。オーナーの細田ヨネイチさんが全国から集めた玩具や紙飾りがとところ狭しと飾られている不思議な空間。由来を一つ二つ説明してくれて、あつという間に時間が過ぎていく。

ノスタルジック小学校。

南川は高麗川上流にある山深い集落。旧南川小学校は、明治7年に創立し、平

成5年に閉校した。地域の年配者のほぼ全員がお世話になつている思い出が詰まつた空間である。

明治後期と昭和初期に建てられたという木造の校舎に、郷愁を覚えたい人はまづいらないだろう。そのノスタルジックな佇まいが脚光を浴び、映画やドラマのロケ地としても使われるようになった。「飯能ひな飾り展」への参加は、数年前から始めているが、ほつりできる地域の皆さんのもてなしが評判を呼び、人気の展示会場になりつつある。

一方、イベント時には注目をされるものの、普段の活用をどうしていくか、この建物においても課題はそこにある。現在、地域住民の集まりや選挙の際にも活用されているそう、来月7日にはお花見の会が催される予定だと、帰りがけに教えていただいた。

普段着なのがいい。

2018年の出展会場は、119か所が揃った。これで4回目から10年連続で3

小町朝市

まちにとけ込む。

イベント最終日に、「小町公園」で催されていたのが、「小町朝市」と名付けられたミニイベント。「美味しい料理に／地元野菜／すてきな雑貨に／楽しい音楽」とチラシに書かれているように、混とんとした中に地元感があふれていた。

「小町公園」は、飯能大通り商店街の一角で作られた小ぢんまりとした公園。西川材の木の香りが芳しい公衆トイレがあるだけの空間であるが、小さくとも、コミュニティパークとして多目的に活用されている。この場所を利用して、年数回マーケットイベントを行っているのが、佐藤洋昭さんだ。飯能で育ったという佐藤さんは、数年前、公園隣の空き店舗にHachiauという夜カフェをオープンした

(その後、日高市横手に移転)。仲間とともに店を改装しているのときまに同じタイピングで公園が作られていたせいで、構想の発端となったのはそんなところにある。

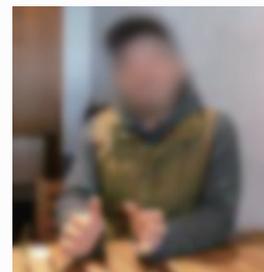
主催は飯能大通り商店街とある。イベントを企画するにあたり、丸屋酒店の井上さんに相談したところ、商店街の催し物として展開した方がいいとアドバイスされた。「町内会などのつながりは嫌いだじゃない。」という佐藤さんは、商店街にも加盟し、まちにとけ込んだ。

新たなにぎわいを。

この場所で「市」をやるのが面白いと思う。飯能大通り周辺は、その昔、最もにぎわっていたエリアで、江戸元禄の頃から六斎市が立ち、縄炭、薪などの売り買いが行われた。さらには絹織物の取引が盛んになり、江戸末期には、絹織物のほか清酒、米穀など、あらゆるものが交易されたと言われている。そんな由緒ある場所で、地域の雑貨や食品を持ち込み、現代風の売り買いをしていることが楽しい。



早い者勝ちの場所取り争いに敗れたのか、クラフト作家の清水麻由さんが公園の隅の方で消しゴムはんこの実演販売をしていた。かわいいはんこは、子どもたちに超・人気。持ち手には西川材が使われている。



感幸（観光）地としての飯能

私と飯能との結びつきは、5年ほど前から。ホテル勤めの経験から市役所職員対象の接遇向上研修を担当させていただいていたんですね。仕事が終わって、役所の皆さんと地元のお店街に食事に出かけるのですが、どの店でも親しく接していただいたことを覚えています。

そこで感じたのは、飯能の人たちの人の良さです。私に地元の様子を話してくれるのですが、市の職員さんと街の人たちとの意識の近さを感じました。何かみんな仲良しで、情に品があるというか、幸せそうというか、ゆとりのようなものを感じて、少しうらやましくもありました。

それから飯能が好きになり、何度も飯能を訪れ、人々と知り合うなかでこの地域の歴史や文化について多くを学ばせていただきました。そうすると、やっぱりいいんですよ、ここは。縄文時代から人々が住み付き、奈良時代に高麗の人々が派遣されてきて、外の文化をうまく取り入れながら発展してきた歴史があります。仕事柄、あちこちに行きましたが、近くにこんなにも味のある地域があるとは発見でした。

10数年前 飯能は「森林文化都市宣言」をしていますね。「文化」をスローガンに入れるのって勇気がいることです。それができてしまうのは、この地域に文化的な素地が備わっているからなんです。また、小さな街でありながら地場の日刊新聞が存在

していることも驚きです。それも「文化新聞」と名付けられているのだから、うれしくなっています。

成長産業の二つとして、観光分野が伸びていくことは間違いないと考えています。この流れにおいても、飯能は素晴らしい可能性を秘めているのではないのでしょうか。例えば、飯能には蔵が点在しています。その使われ方は様々ですが、暮らしに思いついた形で保存されているようです。それらを外国人が見たら、きっと惹きつけられるんじゃないでしょうか。

ハードの部分だけでなく、ソフト面にもポテンシャルがあります。さっき申し上げた情報の部分ですね。おもてなしと言っても、ホテルのような格式はつたものが良いとは限りません。ここには、暮らしと結びついたすてきなおもてなしがあります。

飯能の人たちはのんびりしていて、その良さに気付いていません。私も、そのような奥ゆかしさに魅力を感じていたりするのですが、ストーリーを持たせて発信していけば、他のまちに負けない力を発揮するに違いありません。



プロフィール
長嶋正典さん
昭和54年(株)ホテルパシフィック東京入社。ホテルグランパシフィックケル・台場を経て、同社顧客開発部部长。退職後、一般社団法人奥むさし飯能観光協会観光案内所所長に。

飯能の風情って？

武蔵野鉄道を通じ、天覧山周辺の遊覧地計画をもとに保養地として名を馳せた大正期～昭和初期、疎開により文学者や芸術家などの多様な才能が流入し、華を咲かせた昭和20年30年代― この2つの時代が、飯能文化の黄金期であると考えている。

高度成長期～平成バブル期になると、経済効率優先の世の中となった。人々は都会的で洗練されたものにあこがれるようになり、自然の豊かさや地域の個性を好む者は少数派に追いやられた。都会的である方が優れているとする価値観は、全国の地方都市における了解事項となり、ショッピングモールやファーストフード店の有無により地域の優劣が計られた。その頃、飯能地域にもいくつものニュータウンが造られている。とはいえ、西武線やJRにより都心へ通勤するミッドタウンとするには若干遠く、宅地化は疎らに展開され(「天覧山多峰主山の自然を守る会」(通称：てんたの会)による宅地化反対署名運動や自然観察会などの取り組みが自然保全への大きな力となっていることを忘れてはいけない)、都心に近く利便性の良い所沢や入間の方がよりぎやかな街として発展した。

それとは別話であるが、自然の豊かさには人々の歩みをスローテンポにする効力があるようで、急速な変化を望まないエネルギーが、この地には働いた。「山間地には、街の基準とは違つ豊かな暮らしがあつて、こうした楽しみを街の人に教えてしまつたのはもったいないと思つている節がある。」と以前、別の冊子に書いたことがある。都会の暮らしにあこがれはするが、それはそれとしてしまい、ここには、この深みのある暮らしがあることに人々は気づき、誇りを持っている。

穏やかな春の日に、ひな飾りを追いかけて、飯能市内のあちこちを取材した。まちなかの「軒」軒や河原や山辺を訪ね歩いたら、明治、大正、昭和、平成とそれぞれの時代において住民が選択した最良の結果がそのまま表れているように感じられ、この景色を見ても愛おしく思えた。いつの頃からか世の中は地域の個性を探し求める方向へ変遷し、今、飯能文化は新たな黄金期に差し掛かろうとしている。のんびりと構え、大きな変化を求めなかつたことがこの地に幸いをもたらしたのである。自然環境の好ましさに加え、冒頭で示した繁栄の残影が随所に見られ、希少価値のある、何とも言えない風情を醸し出している。(文/石井 茂)